

⑤2)の「部屋」の順で空間が広くなることと関係があるようだ。

もともと、このような用法は、〈注7〉でも述べたように、次のような慣用的な用法を拡大したものと考えられる。

i) 部長が 席を はずす。

このことが、⑤0-⑤2)を許容するかどうかの個人差を生むのだろう。また、i)の「席」は、⑤0)の「持場」より空間が狭いことから、⑤0-⑤2)の許容度の差も、これと関係すると考えられる。

〈注11〉あるいは、「はなれる」の場合の状況でも、「はずれる」が使えりとする話者もいるかもしれない。これについては、後に述べる。

〈注12〉ただし、2.3.で述べた状態的用法は別である。また、5.でも述べるように、次のような用法は問題になる。

i) 矢が 的を はずれる。

〈注13〉⑦6)と比較して、次のi)のような文の不自然さは興味深い。

i) ?惑星が 恒星を回る軌道から はなれる。

ii) 惑星が 恒星を回る軌道から はずれる。

「人工衛星」より「惑星」の方が、「軌道」に「固定」されているととえやすいのだろう。

〈注14〉しかし、国広編1982において、この例文は、「期待」という特徴を出すためのものなのか、「固定」という特徴を出すためのものなのかははっきりしない。

〈注15〉ちなみに、「新明解国語辞典第三版」の「はずれる」の記述には、「正当な・(期待さ

れる)位置」という特徴が、「岩波国語辞典第三版」の記述には、「正常の場所」という特徴が含まれているのに対して、「学研国語大辞典」の記述には、そのような特徴が含まれていない。

〈注16〉ただし、⑫2)(⑫4)(⑫6)の不適合性は、別に説明しなければならない。

〈注17〉「固定されていない状態になる」ということで、事前の固定された状態は含意される。

〈注18〉ただし、「とおざか」り始める直前まで、「目の前にいた」「建物の中にいた」と解釈した場合である。

〈注19〉「接触・近接していない状態になる」ということで、事前の接触・近接した状態は含意される。

〈注20〉なお、「とおざかる」と共起する距離の副詞は、移動後のへだたりを示す。

〈注21〉「新明解国語辞典第三版」は「遠くに離れる」、「岩波国語辞典第三版」は「遠くへ離れる」、「学研国語大辞典」は「〔ある場所から〕遠くはなれてゆく」である。

〈注22〉あるいは、⑬⑩)の場合、「岸」を「岸」の付近の水面も含めて解釈しているのかもしれない。また、⑬⑩)の場合、「はずれる」のは「レー」に直角の方向であるので、この方向には、「レー」の領域内での移動はないと考えられるかもしれない。

言語経歴：1958年11月 東京都豊島区生 3
歳～ 埼玉県朝霞市
(東京都立大学大学院学生)

またぐ・またがる

藤 本 泉

1. はじめに

「またぐ」「またがる」は、国立国語研究所1964で、「2.339 足の動作」の項に分類されている。本稿ではこの二語について、用例を観察分析し、両語の意味の違いを考えてみることにする。また、今のところこの二語について分析した論文を見出しはしていない。

「またぐ」「またがる」は両語とも人間の動作という

観点が基本と考えられるので、動作主体が生物の時は人間を代表とする。また、この分析で使う、対象という語は、「～をまたぐ」「～にまたがる」のような「～」にあたる部分を指す。

2. 「またぐ」

2.1. 継続と瞬間

「またぐ」の動作を次の用例で考えてみる。

- (1) 針箱と糸屑の上を飛び越す様に跨いで茶の間の襖を開けると、すぐ座敷である。

(夏目漱石『門』岩波書店昭和49年版漱石全集第四巻 p. 628。都合により表記は改めてある。以下漱石の用例も同全集による。)

- (2) 中央線をまたいで立ち、「はじめ」の合図で右側の線をまたぐまで横跳し、つぎに中央線にもどり、さらに左の線をまたぎ、また中央線にもどる。

(『新修体育大辞典』不味堂出版)

(1)では対象の上を越えて、主体が移動することを「またぐ」という動作を表す動詞を使っている。(2)は反復横とびについての解説であるが、体力測定の時に経験した人も多だろう。この場合は、主体が線を両足の間にはさんで立つ動作を、「またぐ」と表現している。以上から、「またぐ」には、(1)のように主体が対象の上を移動する場合と、(2)のように主体が対象をはさんで立つという場合があることが分かる。(1)と(2)の文脈を参考に、「～ている」をつけた時の文をつくって確認してみよう。次の文を見ていただきたい。

- (3) 針箱と糸屑の上を 飛び越す様に またいで いる。

- (4) 中央線を またいでいる。

(3)は、この動作が終らず途中であることを示している。他にも解釈はできるが、動作の結果が残存しているとは言えない。従って継続動詞の例と考えるとよいであろう。また、(4)では、「またいで立っている」とすればより明確であるが、動作が終ってその結果が残存していることを示す。従って瞬間動詞と考えるとよいであろう。以上の分類は、金田一1950を参考にしている。ここで、継続動詞と瞬間動詞の「またぐ」の用例を追加しておくので確認していただきたい。

- (5) 代助は、一つ店で別々の品物を買った後、平岡と連れ立ってそこの敷居を跨ぎながら互いに顔を見合せて笑った事を記憶している。

(夏目漱石『それから』同第四巻 p. 329)

- (6) 父がげんかんのしきいをまたいで立ったまま、母と何か話しています。

(文化庁1975『外国人のための基本語用例辞典第二版』の用例より)

2.2.1. 継続動詞の「またぐ」(一)

前に述べたように、主体が対象の上を越えて移動することを、「またぐ」で表現している場合を考える。

次の例を見ていただきたい。

- (7) 男は関を跨げば七人の敵がある。——男が社会に出て活動すれば、常に多くの敵がある。

(『国語大辞典』の「おとこ」の項)

「関(しきい)を跨ぐ」という表現は、「社会に出る」という意味を強調したものと言える。つまり、この用例における「またぐ」は、主体の移動に焦点があると言えるのである。具体的には足の動作であるが、対象の上を越えることを、主体の移動という観点で使用しているわけである。用例の一つ加える。

- (8) 床屋の敷居を跨いだら、白い着物を着てかたまっていた三、四人が、一度にいらっしやいといった。

(夏目漱石『夢十夜』同第八巻 p. 53)

このように、「敷居を跨ぐ」という表現はよく出入りの意味で使用され、『国語大辞典』の「しきい」の項には、その詳しい説明がある。

以上から、生物主体の場合の「またぐ」の意味をまとめてみることにする。足の動作を基本と考えれば、片足をあげて、対象の反対側につけるといっても記述しておかねばならないだろう。しかし、焦点は移動にある。

〈主体(人間など)が、片足をあげて対象の反対側につけ、その上を移動する。〉

2.2.2. 継続動詞としての「またぐ」(二)

これまで継続動詞として人間を主体として考えてみたが、ここでは、対象上の移動を意味していても、主体が人間でない場合を考えてみたい。

- (9) 野田尻の集落をすぎ、中央高速をまたいで大目宿へ向かうと、途中、左下方に中央高速の談合坂サービスエリアが見えてくる。

(『サイクルスポーツ』八重洲出版 1983年4月号 p. 216)

この場合の主体は、人間の乗った自転車である。自転車が、片足をあげる動作をするというのはおかしい。従って、「またぐ」という動作が問題なのでなく、対象を越えていくという移動の意味を強調しようとする意図があるようである。同様の例をあげてみよう。

- (10) 「国境をこえるというのは、このように、線をまたぐわけですね。」

(意味論のゼミでの発言。直線を横切る矢印を書いて指しながら。)

- (11) 月をまたぐ。——二ヵ月にわたる。翌月に及ぶ。

（『国語大辞典』の「つき」の項）

どちらも、境となるものを対象として捉えた表現である。その境を越えることを「またぐ」という動作動詞を使い、強調したのであろう。しかし、もともと人間の足の動作を表す動詞なので、あまり抽象的な主体や対象には、移動の意味として使いにくい。従って、特に(11)は慣用句として扱われているのである。

以上から、次のようにこの場合の意味をまとめておく。

〈主体が、境となる対象を、越える。〉

2.3.1. 瞬間動詞としての「またぐ」(一)

ここでは、(2)(6)のように主体が両足の間に対象をはさんで立つことを表わす場合を考えてみる。次の用例を見ていただきたい。

(12) 自転車をまたいで動かないようにし、サドルをしっかりとつかみ、上下、左右に力を入れ、ゆるみがないかを確かめる。

（『自転車の整備と修理』八重洲出版 p. 79）

これは、組立てたばかりのスポーツ用自転車についての記事で、写真があってその説明の文である。サドルのゆるみを調べるため、人間が自転車の後ろから後輪をしっかりと両足の間にはさんで、おさえて安定させることを意味している。必ずしも片足をあげることは必要としない。ともかく、「はさんで立つ」ことに焦点があり、(2)(6)を見ても同様のことがいえよう。ただし、(12)では主体と対象が接触する。この接触については、動作の目的や対象の性質によるのであろうと思われる。以上から、次のように生物主体の場合の「またぐ」の意味をまとめておく。

〈主体（人間など）が、対象を両足の間にはさんで立つ。〉

2.3.2. 瞬間動詞としての「またぐ」(二)

いままでは、瞬間動詞として、人間を主体として考えてきた。ここでは、人間でない場合、すなわち無生物が主体の場合の用法をとりあげる。まず用例を見ていただきたい。

(13) 名古屋市中区の桜通りをまたぐセントラルブリッジ。

（読売新聞より。橋の写真の説明文。）

無生物である橋が、人が両足をひらいて対象をはさんで立つ姿を連想させることから、「またぐ」という動作動詞が使用されているのであろう。また、この用法には、語法上の制約がありそうである。次の例を見

てほしい。

(14) セントラルブリッジは 名古屋市中区の桜通りを またぐ。

この場合は、「桜通りに かかる」という方が自然であろう。あえて「またぐ」を使うとすれば、「～ている」を使って次のようにすれば、比喩的な感じもするが不自然でない。

(15) セントラルブリッジは 名古屋市中区の桜通りを またいでいる。

次に、主体になるものについて考えてみよう。用例を一つ加えるので御覧いただきたい。

(16) 環状5号線をまたぐ2本の横断橋がある。

（植村俊亮1974『電子計算機による自動索引の研究』より）

これを見ても、主体は橋のようなものと限定してよさそうである。そこで、主体が無生物の場合の瞬間動詞の「またぐ」を、次のようにまとめておく。

〈主体（橋など）が、対象を上からはさむようにして、たっている〉

2.4. 他の用法

これまで出てこなかったが、観察記録の中から次の用例をあげておきたい。テレビのあるクイズ番組でのこと。わざと曇らせた画面を見て、人がどんな動作をしているかをあてようという場面でのことである。

(17) 解答者A 「まりをついているところです。」

司会者 「そのとおり！」

解答者B （正解の画面を見て）

「ああそうか。またいでいるのね。」

まりをつきながら、足をあげてその下にまりを通すという動作はよく子供がするが、それに「またぐ」という動詞を使ったのである。足の動きに注目して出たことばだが、これは、誤用なのであろうか。今のところ、これが一般的用法かどうか不明であるので、本稿の分析からははずすことにした。

2.5. 「またぐ」の文化的特徴

「またぐ」という動詞には、その動作を嫌うことから、次のような用例が出てくる。

(18) 本を跨ぐと知恵がつかない。

この用例は、『故事俗言ことわざ大辞典』によるものである。それによると、こうしたマイナスのイメージで「またぐ」を使用している例が、60以上ものっているのである。それに対し、「またがる」は二例だけであり、「またぐ」という動作には、好ましくない印象

があると言えるであろう。

3. 「またがる」

3.1. 生物主体の「またがる」

「またがる」という動詞はどういう動作を指すのであろうか。次の用例をまず見ていただきたい。

(19) 以来、たとえ日本人でも見知らぬ人には自転車にまたがらせないようにしている。

(遠藤祐弘「サイクリング」実業之日本社 p. 188)

この例では自転車にのることを、「またがる」という動詞で表わしている。同じのるものでも自動車とかベッドなどにのるとき「またがる」は使えない。馬の場合を考えてみれば分かるが、「またがる」を使うのは、普通は片足をあげて横から対象の上に乗る場合である。この動作の結果、両足はひろげていなければならない。これは次の例で確かめられる。

(20) 子供がシーソーにまたがる。

(21) *子供がブランコにまたがる。

ブランコは、足をそろえて椅子にすわるようにのるのが普通なので、(21)はおかしい。こうした「またがる」の用法は、「～ている」とつけるとどうなるだろうか。

(22) 子供がシーソーにまたがっている。

この例では、「またがる」の表す動作の結果が残存していると考えられ、動作の継続ではない。従って金田一1950によると、「またがる」は瞬間動詞としての性格が強いと言えよう。

「またがる」は必ずしも片足をあげる動作をしなくても、結果が両足をひろげ、対象の上に主体が乗っていれば使用できる。次の例を見ていただければ分かるだろう。

(23) 木の枝にまたがって下を見おろす。

(『角川類語新辞典』より)

生物主体の「またがる」の意味を次のようにまとめてみるができるだろう。

主体(人間など)が、対象の上に、両足をひろげた形で、のる。

3.2. 無生物主体の「またがる」

「またがる」の用例は、無生物主体のものが、「またがる」よりかなり多い。無生物といっても具体的な物から抽象的な事まで、主体となりうるものも種類は多い。まず、分かりやすく、具体物が主体となる場合から分析してみることにする。

3.2.1. 非接触の「またがる」

まず次の例をみていただきたい。

(24) 吾妻橋は隅田川にまたがっている。

(『研究社新和英大辞典第四版』)

この例では、隅田川という対象の上に、両足をひろげたように吾妻橋が建っていることを指している。ここで興味深いのは、川と橋は接触していないという点である。前に述べた生物主体の場合は、対象の上に乗るのであるから、当然接触していたのである。非接触の「またがる」は、主体が両足をひろげたようにたっている場合に使いやすく、主体と対象が接触をさけるためと考えられ、その典型が橋なのである。以上から、次のように意味をまとめてみることにする。

主体(橋など)が、対象の上に接触しないで、両足をひろげたようにたっている。

3.2.2. 越境の「またがる」

越境とはつまり境を越えるということである。前に述べた非接触の「またがる」は、主体と対象の非接触についてが焦点となったが、越境の「またがる」の場合は、対象によって表わされる境が焦点となる。次の例を見ていただこう。

(25) イラン、アフガン国境にまたがるシスタン地方から、……

(読売新聞1983年8月1日朝刊)

(26) 宮城県では、泉市の山林から出火、仙台市など三市三町にまたがって燃え広がり、……

(読売新聞1983年4月28日朝刊)

これらの例文から、「またがる」の対象となる部分を観察すると、どちらも境となるものであることが分かる。(25)では国境で、文字通り境であるし、(26)も三市三町の境が対象となっていると考えられる。そして、そうした境となるものを越えて、主体が広がっていることを「またがる」で表わしている。

この用法において主体となりうるものは、(25)(26)のような地理的なものだけでなく、次にあげるように時間的なものもある。

(27) 最後の試験は来月にまたがるでしょう。

(文化庁1975 前掲書より)

(28) 最初の子育てでは各人に2週を当てていたのがあるが、多くの場合時間が足らず、3週から4週にまたがることとなった。

(國廣哲彌編「意味分析」東大文学部言語学研究室1983年まえがきより)

(29) そのうち段々手紙のやりとりが疎遠になって、月に二週が一週になり、一週が又二月、三月

に跨がる様に間を置いて来ると、……

(夏目漱石『それから』同第四巻p. 329)

これらの用例において「またがる」の対象となっている部分は、(27)では「来月」で、つまり今月と来月の境ということが言外にあるし、(28)では2週と、3週または4週の間境があり、(29)では二月、三月という期間を境とみなすことができる。そして、どの用例も主体となる事柄が、そうした境を越えていることを表しているのである。

以上を一つの意味としてまとめてみよう。

<(地理的、時間的なことを表す)主体が、境を表している対象を越えている。>

3.2.3. 関係の「またがる」

これまで分析した非接触と越境の「またがる」は、主体が対象を越えるという点では、共通しており、対象のあり方が異なっていたと考えられる。しかし、次にあげる関係の「またがる」は、対象を越えるというのではなく、対象と関係を持つとも言えるようなものである。次の例を見ていただきたい。

(30) 保守主導型で、保守と革新にまたがる政治勢力によってつくられる連合政権を、保革連合政権と呼ぶ。

(『女子大短大生一般常識テスト』有紀書房 p. 104)

(31) 各省庁にまたがる問題でもあれば、その調整に……

(植村俊亮1974 前掲書より)

(30)では、保守と革新の両方からできていることを「またがる」で表現しており、(31)では問題が各省庁と関係を持っていることを「またがる」で表現している。つまり、(30)と(31)は対象となるものが二つ以上で、それらとある一つの主体とが何らかのつながりを持つと考えられるわけである。これにあたる「またがる」の用例は最近よく見られるように思う。漱石の作品を何編か読んでみたが、「またがる」のこのような使い方は今のところ見出せない。ともかく、用例をいくつか加えておくのでごらんいただきたい。

(32) 聖火リレーは全五十州にまたがり、計一万九千キロ。

(読売新聞1983年8月8日夕刊)

(33) たとえ両方の集合にまたがった要素があっても、それは和集合に二回現われるのではなく一つと考えられる。

(草薙裕『コンピュータ言語学入門』大修館

p. 49)

(34) 世界にまたがる英連邦。

(35) いろいろな分野にまたがる仕事。

(34)(35)は出典を省略させていただいた。このなかで、(32)などは、越境の「またがる」とも言えそうである。このように、必ずしも一つの枠におさめることができない場合も出てくる。しかし、非接触、越境という分類の後に残った用例は、関係という用語で分類が可能のように思われる。そこでこの関係の「またがる」を、不十分であるが次のようにまとめておく。

<主体が、複数ある対象と、それぞれある関係を持っている。>

3.3. 他の用法

用例を数多く集めていると、誤用のようなものも見つかる。また、誤用かと思っても、絶対に誤りであるとは言えない、いわば言い得て妙な用例も出る。例えば「またぐ」の(17)のように「まりをまたぐ」という表現は、誤用とは言えないように思われる。ここで、「またがる」の場合の、そうした例の一つあげておく。

(36) ディスプレイ上から入力される単位は、通常は1行ごとですが、行をまたがって打鍵した場合には、複数の行を入力することも可能です。

(沖電気工業『OKI-BASIC文法解説書』)

コンピュータのディスプレイには、打鍵した文字や数字が横に写し出されていくが、一行をオーバーして打鍵すると次の段に移って表示が続けられる。このように一行分を越えて打鍵することを「行をまたがって打鍵する」と用例では表現しているのである。

これまでの用例では、「またがる」の対象は、すべて「一に」という形であった。また、ここで載せなかった用例の中には、「～まで」「～と～とに」という形もあった。しかし、(36)のように「～を」というのはなかった。これは、「二行にまたがる」の誤用であろうか。今回は、ここに記録するにとどめたい。

4. 「またぐ」と「またがる」の比較

これまでの分析から、両語の意味の類似点を考えてみたい。そのために、まず比較しやすくするために、これまでの意味を、まとめて以下に記しておく。

「またぐ」

(一) 主体(人間など)が、片足をあげて対象の反対側につけ、その上を移動する。

(二) 主体が、境となる対象を、越える。

(三) 主体(人間など)が、対象を両足の間にはさ
んで立つ。

(四) 主体(橋など)が、対象を上からはさむよう
にして、たっている。

「またがる」

(一) 主体(人間など)が、対象の上を、両足をひ
ろげた形でのる。

(二) 主体(橋など)が、対象の上を接触しないで、
両足をひろげたようにたっている。

(三) (地理的、時間的なことを表す)主体が、境
を表している対象を越えている。

(四) 主体が、複数ある対象と、それぞれある関係
を持っている。

以上から、まず主体が生物(人間)の場合の用法を
見ていただきたい。「またぐ」の(一)(三)と「またがる」の
(一)である。「またぐ」は、対象の上の移動か、対象を
はさんで立つことを表し、「またがる」は、対象の上
のることを表す。すなわち、この両語の動作の目的は、
移動すること、たつこと、のることという異なったも
のであり、各々異なった動作を指していると言えよう。
従って、この用法では、両語に類義関係があるとは、
認められない。

しかし、橋などが主体となる場合はどうであろうか。
「またぐ」の(四)と「またがる」の(二)を見ていただきたい。
どちらも、ほぼ同様のことを指している。ただ、「また
ぐ」の場合、(四)であげたように、橋など無生物のとき
は、「～ている」の形にしなければ使いにくいよう

ある。次の例を見ていただきたい。

(37) 吾妻橋は 隅田川を またぐ。

(38) 吾妻橋は 隅田川を またいでいる。

(39) 吾妻橋は 隅田川に またがる。

(40) 吾妻橋は 隅田川に またがっている。

(37)と(38)は判断の分かれるところであろうが、(37)は不
自然であると思われる。また、(39)(40)の意味的違いは、
ないと言ってよいのではないだろうか。語形が違っ
ても意味的な違いが見出し得ないことから、この場
合における「またがる」は、瞬間動詞か継続動詞かの
分類には大変迷うところである。

越えるという場合の用法においてはどうかであろうか。
「またぐ」の(二)、「またがる」の(三)を見ていただきたい。
「またぐ」の方は、主体の動作を指しているが、「また
がる」の方は主体の状態を指している点が異なる。

以上のほかに、「またがる」の(四)は、「またぐ」に比
較できる用法がなく、「またがる」だけが持つ意味で
あろう。

本稿を書くにあたり、中本ゼミの皆様、及び中本正
智先生には大変お世話になった。また、東京外大の井
上史雄先生には、貴重な助言もいただいた。記して感
謝致します。

言語経歴：1955年11月 神奈川県鎌倉市生

0歳～2歳 鎌倉市 2歳～15歳

埼玉県川口市 15歳～19歳 埼玉県

上尾市 19歳～25歳 東京都調布市

25歳～ 埼玉県桶川市

わたる・こえる

藤田勝良

1. はじめに

「わたる」「こえる」は、ともに広い意味領域を有し
ているが、^(注1)具体的な移動を意味する動詞として用いら
れるときには、次のように類似した意味を表わす文を
作る。

(1) 川を わたる。

(2) 川を こえる。

ここでは、このように具体的な移動を意味する動詞
として用いられた場合の両語の意味のちがいを考察し
たい。

2. 構文

具体的な移動をあらわす動詞と共起する名詞句には、
移動主体を表示するもの、出発点を表示するもの、経
由点を表示するもの、到着点を表示するものの4種が
考えられる。この4種の名詞句と「わたる」「こえる」
との共起関係を比較してみよう。

(3) 人が 海を わたる。

(4) 人が 海を こえる。

半沢1977に指摘されているように、移動主体を表示
する名詞句、經由点を表示する名詞句は両語と共起可